

原 著

中学校における体育実技授業の 見学者対応に関する全国調査

橋本実来*¹ 井村亘*² 中川麻衣子*³
中尾有子*³ 難波知子*³

要 約

令和3年（2021）度から全面実施された中学校学習指導要領は、体育分野の運動領域において、運動の特性に応じた技能を行いながら、心身の健康の保持増進をすることを目的に含めている。また、体育実技授業には、怪我や体調不良などの理由で実技には参加せず、見学している生徒もいることから、見学者対応についても考えなければならない。しかしながら、中学校における体育実技授業の見学者対応に関する研究は十分になされておらず、授業への参加や評価の実態や課題は明確ではない。そこで、本研究は、全国の中学校保健体育科教諭を対象とした質問紙調査により、体育実技授業の見学者対応の実態と課題を明らかにすることを目的とする。調査により、以下の3点が見学者対応の実態として明らかになった。(1)1学期に実施された体育実技授業のうち約8割に見学者がおり、そのうち回答者の約7割は個別学習を提示していたこと、(2)見学理由は、「けが」、「病気」、「月経」が約8割を占め、「体操服忘れ」や「着替えが恥ずかしい」など体育科特有であると考えられるものもあり、見学理由は多様であったこと、(3)これまでの勤務経験の中で学習指導案に見学者対応を記載していたのは全体の約2割と少数であったこと、である。これらの実態から、体育実技授業において多様な理由をもつ見学者に対して、体育に関する学習保障を行う必要性を課題として見出すことができた。

1. 緒言

体育は、小学校から高等学校までの必修科目として位置付けられている科目である。中でも本研究の対象とした中学校は、義務教育修了段階にあたり、第46条第2項（第30条の読み替え条文）において「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、特に意を用いなければならない」こと、また、同法第21条第8号において「健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養うとともに、運動を通じて体力を養い、心身の調和的発達を図ること」と規定されている。これらを踏まえた、中学校学習指導要領¹⁾では、保健体育科の目標に「心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す」ことを掲げている。体育は、運動の特性に応じた技能を行いつつも、心身の健康の保持増進

を目的に含めていることが理解できる。

体育実技の授業では、けがや体調不良などの理由で実技を行うことができない生徒や運動嫌いで体育をしたくない生徒など、体育の授業には出席しているが実技には参加せず見学する生徒が存在する。橋本ら²⁾は、中・高等学校で保健体育科の教育実習を行った34名の学生を対象とした質問紙調査を実施し、見学者のいる体育授業を行った者が74%いたこと、教育実習中の見学者対応に関して困難な場面に遭遇したことについて報告し、その中で、教員養成課程段階で見学者対応に関する学びの充実を図るためには、学校現場における見学者対応の実態を明確にする必要性のあることについて言及した。しかしながら、管見の限り、見学者対応の実態に関する調査研究は、実施されておらず、また、関連論文は「特集：見学者を考える（体育の科学第38巻（1988）」

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康体育学専攻

*2 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻

*3 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

（連絡先）橋本実来 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : wd221002@kwmw.jp

に掲載された6文献に止まっている。以上から、生涯にわたる学習基盤を培う事が求められる中学校の体育実技授業における見学者対応について全国規模の実態を明らかにし、課題を見出す必要性があるという考えに至った。

2. 目的

本研究は、全国の中学校保健体育科教諭による体育実技授業の見学者対応の実態と課題を明らかにすることを目的とする。なお、本研究における「体育実技授業」とは中学校指導要領保健体育科のA～Gの運動領域、「見学者」とは体育の授業には出席しているが実技には参加していない生徒と定義する。

3. 方法

3.1 サンプルの抽出方法

母集団は令和2(2020)年度文部科学省統計による全校公立中学校9,291校である。許容誤差5%(信頼レベル95%)を担保するサンプル数を得るために、回収率25%と推定して質問紙を郵送する中学校1,500校を算出した。対象校の抽出方法は、全国の中学校所在地が掲載されている「学校総覧」から上記の全中学校をナンバリングし、ExcelのRAND関数で乱数を作成して無作為抽出した。

3.2 調査方法及び調査対象者

調査方法は、無記名自記式質問紙調査を行った。調査時期は、2021年9月～10月末日とし、調査対象者は、3.1の方法で抽出した中学校に勤務する保健体育科教諭1名とした。

3.3 調査内容及び分析方法

調査内容は、令和3(2021)年度の1学期時点にお

ける①保健体育科教諭としての経験年数、②体育実技授業における見学者対応、③頻回見学者に対する対応、④学習指導案に記載された見学者対応の記載内容、⑤見学者対応に対する意見である。このうち、②は、学習指導要領における体育分野のA～G領域別に問うた。A～G領域とは、「A体づくり運動」、「B器械運動」、「C陸上競技」、「D水泳」、「E球技」、「F武道」、「Gダンス」の7領域である。データ分析は、①は木原³⁾による教師の発達段階による分類、②は単純集計、④の記述内容は帰納的に分類した。また、⑤は活用できる意見を抽出して考察の項に反映させた。統計処理にはExcelの分析ツールを用いた。なお、③の頻回見学者に対する対応は、Data量が多いため、整理分析後に別途公表することとした。

4. 結果

回答は、1,500校中369校から得られた(回収率25%)。有効回答率は100%であった。

4.1 回答者の属性

回答者の属性を表1に示した。木原³⁾は、「若手教師」(5年未満)、「中堅教師」(5年以上15年未満)、「ベテラン教師」(15年以上)と段階を追って発達

表1 保健体育科教諭としての経験年数

教師区分	N=369	
	n	%
若手教師	78	21.1
中堅教師	145	39.3
ベテラン教師	145	39.3
未回答	1	0.3

表2 令和3年度の1学期における領域別授業実施と見学者及び個別学習の提示

領域	a. 授業実施		b. 見学者有り (母数=aのN)		c. 見学者に対する 個別学習の提示 (母数=bのn)	
	N	n	n	%	n	%
A 体づくり運動	335	207	207	61.8	133	64.3
B 器械運動	203	175	175	86.2	121	69.1
C 陸上競技	473	404	404	85.4	272	67.3
D 水泳	186	176	176	94.6	150	85.2
E 球技	421	311	311	73.9	214	68.8
F 武道	25	20	20	80.0	14	70.0
G ダンス	83	46	46	55.4	29	63.0
A～Gの合計	回数	人数	人数	平均値	回数	平均値
	1,726	1,339	1,339	76.8	933	69.7

するとしている。そこで、回答者の属性を分かりやすく示すため、本研究では、木原³⁾の区分を用いて、回答者の属性の分類を行った。その結果、保健体育科教諭としての経験年数は、「若手教師」が78名(21.1%)、「中堅教師」が145名(39.3%)、「ベテラン教師」が145名(39.3%)、無回答が1名(0.3%)であった。性別では、男性が253名(68.6%)、女性が108名(29.3%)、無回答が8名(2.2%)であった。

4.2 1学期における領域別授業実施と見学者及び個別学習の提示

1学期における領域別授業実施と見学者及び個別学習の提示の結果を表2に示した。全体での授業実施の合計は1,726件、この内、見学者がいたのは1,339件(76.8%)、個別学習を提示していたのは933件(69.7%)であった。

4.3 領域別見学理由

領域別見学理由の結果を表3に示した。A～G領域の見学理由を総計した合計数は、2,677件であった。その内訳は、「けが」が1,180件(44.1%)、「病気」が758件(28.3%)、「月経」が314件(11.7%)、「精神的」が214件(8.0%)、「その他」が211件(7.9%)であった。さらに、「その他」の内容には、「体操服忘れ」が125件、「新型コロナウイルス感染症対策」が42件、「ワクチン接種による副作用」が28件、「発達障害」が12件であった。

また、領域別の見学理由では、水泳を除く5領域は「けが」が最も多く、2番目に多かった理由は、「病気」であった。どの領域においても「けが」の割合は約5割、「病気」は約3割であった。一方、水泳で最も多かった理由は「月経」の3割であった。

表3 領域別見学理由

領域	N	けが		病気		月経		精神的		その他		その他の理由
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	
A 体づくり運動	405	191	①47.2	122	②30.1	31	7.7	36	8.9	25	6.2	体操服忘れ、着替えが恥ずかしい、発達障害、新型コロナウイルス感染症対策、ワクチン接種副作用
B 器械運動	317	159	①50.2	89	②28.1	26	8.2	15	4.7	28	8.8	体操服忘れ、着替えが恥ずかしい、新型コロナウイルス感染症対策、ワクチン接種副作用
C 陸上競技	798	371	①46.5	236	②29.6	72	9.0	70	8.8	49	6.1	体操服忘れ
D 水泳	479	133	②27.8	108	22.5	148	①30.9	35	7.3	55	11.5	体操服忘れ、水着が嫌・着替えが面倒・日焼けが嫌、経済的な理由で水着が準備できないため
E 球技	565	271	①48.0	167	②29.6	31	5.5	48	8.5	48	8.5	体操服忘れ
F 武道	36	17	①47.2	11	②30.6	3	8.3	4	11.1	1	2.8	体操服忘れ
G ダンス	77	38	①49.4	25	②32.5	3	3.9	6	7.8	5	6.5	体操服忘れ
A～Gの合計	2,677	1,180	①44.1	758	②28.3	314	11.7	214	8.0	211	7.9	

表5 学習指導案に記載された見学者の授業時間の学習内容

表4 学習指導案に記載された見学者対応の記載内容

N=74		
記載内容	n	%
授業時間の学習内容	59	79.7
見学場所	3	4.1
評価	2	2.7
見学者への配慮事項	3	4.1
その他	7	9.5

N=125					
	N	%	内容	n	%
学習活動	60	48.0	見学者ワークシートへ記入	27	21.6
			他の生徒へアドバイス	17	13.6
			グループワークへの参加	9	7.2
			可能な運動実施	4	3.2
			調べ学習	1	0.8
			観察	1	0.8
			補講	1	0.8
補助活動	65	52.0	記録測定の補助	15	12.0
			審判	13	10.4
			ビデオ撮影	11	8.8
			得点係、タイマー係	9	7.2
			授業運営補助	5	4.0
			他の生徒の補助	5	4.0
			準備・片付け	7	5.6

4.4 学習指導案に記載された見学者対応の記載内容

体育実技の学習指導案に見学者対応について記載していたのは74人(20.1%)であった。表4には回答者が学習指導案に記載した見学者対応の内容を示した。さらに、記述回答者の8割に当たる59人から得られた「授業時間の学習内容」に関する記述内容から抽出した125件のコードについて、意味内容別に分類した結果を表5に示した。その結果、「見学者ワークシートの記入」や「他の生徒へのアドバイス」、「グループ活動への参加」などの〈学習活動〉の60件と、「記録測定の補助」、「審判」、「ビデオ撮影」などの〈補助活動〉65件に二分された。

5. 考察

今回の調査結果は、全国の中学校9,291校を母集団として無作為抽出により行い、信頼レベル95%を担保する369校から得られたデータを分析したものである。そのため、全国の保健体育科教諭の見学者対応に対する意見を反映している結果として捉えられる。以下の考察では、調査内容⑤の見学者対応に関する意見を〔 〕で示し、体育実技授業における見学者対応の実態を踏まえた課題について述べる。

5.1 中学校の体育実技における見学者対応の実態と課題

今回の調査では、体育実技授業の約8割に見学者が存在し、回答者の約7割が見学者に対する個別学習を提示していた。このことから、中学校の体育実技授業における見学者の存在は常態化していること、保健体育科教諭の多くが見学者に対する個別対応を行っていることの実態が明らかとなった。回答者の勤務経験は、約6割が15年未満であり、若手教師・中堅教師の割合が多かった。嘉数ら⁴⁾は「『若手教師』は、授業の実践に関する悩みを抱えてながらも、生徒指導や部活動指導などそれ以外の役割が求められており、授業の充実や改善に向けて十分に取組んでいない傾向であった」と述べている。さらに、中堅教師は、ミドルリーダーともいい、若手教師の育成や学校組織の中心となって学校全体を組織する役割も担っている。

回答者の指導対象である中学生について、松田⁵⁾は、「思春期に直面している時期に当たり、内面を正しく把握・理解することが難しい年代である」と述べている。また、他の校種の生徒と比べて生徒指導上の課題が多く⁶⁾校務分掌の当て職として「生徒指導主事」を担うことの多い保健体育科教諭は、業務量の多さと煩雑さから教材研究を行う時間の確保でさえ難しい状況にあることは容易に推察できる。

回答者からも〔見学者が多数いる場合や、実技実施者に付きっきりになるような場合には、教師ひとりでの対応が難しいものがあると、時折感じています。〕といった意見があった。木下⁷⁾は、「一人の教師が集団を対象に体育の授業を行う限り、特定に別の指導を行うことは、事実上不可能である。やはり、少人数でも学級を別にした体育の授業を、学校管理の問題として考えなければならない」と述べ、個別の見学者対応は、教育行政にまで発展する問題であることを指摘している。さらに、令和2(2020)年度初めから流行が始まった新型コロナウイルスの感染対策により、授業で使用する器械・器具や用具などの使用前後の消毒や授業中の接触により感染予防及びマスク使用の調整等⁸⁾が求められ、保健体育科教師の負荷は、ますます増加している。このような状況の中で、見学者対応の充実を図るためには、人的支援の検討が課題であろう。

5.2 体育実技授業見学者の見学理由の実態と課題

本調査では、体育実技授業の見学理由の割合を明らかにした。「けが」と「病気」全体の約7割を占め、「月経」と「精神的理由」も各々1割程度存在した。三浦ら⁹⁾は、体育活動に参加できない理由としてスポーツや交通事故による傷害者、身体障害者、内科的疾患、運動着や靴を忘れた不注意者等のある実態を列挙し、見学者を体育実技の除外対象とみなすことなく適切な運動指導を行う対象と捉えなおす必要性と方法について論じている。回答者からは〔指導者としては、見学者がいないことが理想である。しかし、病気やけが、アレルギーや女子の月経等はさけることができない。頻回に見学させないためにも、体育実技を「休みたい、やりたい」と思われる授業作りをしていきたい。〕という前向きな意見がある一方で、〔一時的な見学ならば対応できるが、先天的な病気をもつ生徒や、長期間見学しなければならないケガや病気をもつ生徒への対応は、学び・活動を満足させられるものを用意するのが難しいと感じています。〕といった困難感も抱えていた。さらに〔見学者については、本当にけが、病気なのか、精神的なものなのか判断が難しい〕や〔明らかに怪我をしているとか熱があるとかであれば、見学を許可するが、やりたくないからという理由かどうか判断するのが難しい〕場合もあり、見学理由は多種多様である。万が一のことを考えると、本人の申告を信用して「見学」扱いにせざるを得ない場合もある。特に水泳領域における「月経」を理由とする場面において見学を認めるか否かは、体育教師がよく遭遇する困難場面であろう。しかしながら、見学

者に対する個別対応がなされなければ、彼らは、学習のめあてをもてず、運動場を傍らで見る「傍観」している⁷⁾だけの出席となる。そのため、体育実技授業における「見学」の概念を定義化した上で、実技への参加の是非や方法について生徒と共に考え、教科の目標が達成できるようなかわりが求められる。また、筆者らが児童生徒の見学理由に応じた適切な対応を考えるために提案した、「健康状態を的確に把握できる問診票」や「体育授業見学者対応マニュアル」の開発²⁾は、本調査結果からも必要性が再確認できた。筆者自身の喫緊の課題として作成し、公表したいと考える。

5.3 体育実技授業の学習指導案における見学者対応の記載内容と課題

体育実技授業の学習指導案における見学者対応の記載していたのは回答者の約2割であった。学習指導案における見学者対応の「授業時間の学習内容」は、大きく分けて〈学習活動〉と〈補助活動〉に分類できた。「記録測定の補助」、「審判」、「ビデオ撮影」などの〈補助活動〉に対しては、「授業の中で、見学者の学習にまで、目がいき届かないのが実際で、用具の準備や審判、記録測定の手伝いなどをさせるくらいしかできていないのが現状である。」、「タブレット等で仲間の運動を撮影するなど、補助的な役割を担ってもらったこともあるが、それがどう学習に結びついているかと聞かれると、自信をもって答えられない。」といった意見があり、補助的な活動を教科の目標に結び付けられていない葛藤がみとれる。課題解決のひとつとして、見学者に提示している〈補助活動〉を、第2期スポーツ基本計画¹⁰⁾に示された『する・みる・支える』^{†1)}の「支える」活動と捉えて直すことはできないだろうか。これら3つの概念は、中学校学習指導要領解説保健体育科編¹¹⁾の教科の目標における「自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」の解説内容にも反映されており、見学者対応を考える上での枠組みとして活用できる

ものとする。〔運動観察力が高められるよう、アドバイスや気づきを見つけさせる時間として設定したい。グループ設定は必ず行うようにすると、アドバイスも出しやすく、見つけやすいと思う。〕「他者の身体」で学びを深める時間。〕の意見における「運動観察力」は「みる」かかわり方を「学習能力」として捉えなおしている考え方として大いに参考になる意見であろう。

6. まとめと今後の課題

本研究では、回答者の約8割が見学者のいる体育実技授業を行っていた。この内の約7割は個別学習を提示していたが、指導案に見学者対応について記載した経験のある者は約2割と少なかった。以上から、体育実技における見学者に対する学習保障を行う必要があることを課題として見出せた。さらに、見学理由は多種多様であることから、実技への参加の是非や方法について生徒と共に考え、学習指導要領に明記されている保健体育科の目標が達成できるようなかわりが求められる。また、回答者の記述の中には、長期的に見学しなければならない生徒もいたことから、長期見学者の授業時間の学習や評価に関する内容、配慮事項などを学習指導案に記載しておくなど、事前に備えておく必要があるのではないだろうか。

本研究は「中学校保健体育科教諭による体育の授業における見学者の学習内容に関する調査」の令和3年度1学期に実施した体育実技授業における授業実施、見学者と個別学習の有無、見学理由、そして、これまでの勤務経験の中で作成した学習指導案への見学者対応の記載の有無と内容のデータについてまとめたものである。今回は、見学者に対する評価や教師の困難感及び考えまでの報告はできていない。よって、次報において、同じ質問紙の中で問うた、頻回見学者（学期の3/1以上の体育実技を見学している者）への個別対応と評価について報告する予定である。

倫理的配慮

学校管理者である学校長への調査協力依頼文書と質問紙を郵送し、調査を許諾した場合は、所属する保健体育科教諭1名に関係書類を渡す旨、依頼した。倫理的配慮として、研究の主旨、参加の自由性、プライバシーの保護、研究成果の公表について明記し、質問紙には「調査協力で同意する」意思を記入する欄を設けた。本研究は、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て行った（承認番号：21-052）。

謝 辞

本研究の対象者として回答してくださった、中学校保健体育科の先生方、公務ご多用の中、有益なご意見や資料提供をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

利益相反開示

本研究に関連し、開示すべき COI（利益相反）に関する企業などはない。

注

- †1) 体育実技科目における「する、みる、支える」の概念は、第2期スポーツ基本計画（2017.3）により示された概念で、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育科編でも用いられ、保健体育科教師の中では、一般化され、生徒に浸透させようと試みている運動・スポーツへの関わり方である。

文 献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）。
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf, 2018. (2022.3.17確認)
- 2) 橋本実来, 内田美奈, 香西庸希, 中尾有子, 中川麻衣子：体育の授業における見学者への対応に関する事例的研究—教育実習生に着目して—。川崎医療福祉学会誌, 30, 385-391, 2020.
- 3) 木原俊行：授業研究と教師の成長。日本文教出版, 大阪, 2004.
- 4) 嘉数健悟, 岩田昌太郎, 木原成一郎, 徳永隆治, 林俊雄, 大後戸一樹, 久保研二, 村井潤, 加登本仁：中学校保健体育教師の体育授業の力量形成に関する研究—教職歴の差異による悩みに着目して—。沖縄大学人文学部紀要, 17, 39-48, 2015.
- 5) 松田文春：生徒指導における特別新教育の視点。中国学園紀要, 20, 1-7, 2021.
- 6) 文部科学省：令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要。
https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf, 2020. (2022.3.15確認)
- 7) 木下秀明：特集 見学を考える—はじめのことば—。体育の科学, 38, 748-749, 1988.
- 8) 文部科学省：学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル—「学校の新しい生活様式」—（2021.11.22 Ver.7）※2021.12.10一部修正。
https://www.mext.go.jp/content/20211210-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf, 2021. (2022.3.17確認)
- 9) 三浦孝仁, 鈴木久雄, 高橋香代：見学者を減らす実践—個人個人に適した体育指導を目指して—。体育の科学, 38, 781-784, 1988.
- 10) 文部科学省：平成29年（2017年）第2期スポーツ基本計画について（答申）。
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/gaiyou/1382785.htm, 2017. (2022.3.15確認)
- 11) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編。
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_008.pdf, 2019. (2022.3.17確認)

(2022年5月23日受理)

A Survey on How to Deal With Visitors to Physical Education Classes at Junior High Schools nationwide

Miku HASHIMOTO, Wataru IMURA, Maiko NAKAGAWA,
Yuko NAKAO and Tomoko NAMBA

(Accepted May 23, 2022)

Key words : junior high school, physical education, visitors

Abstract

The junior high school curriculum guidelines, which were fully implemented from the 3rd year of Reiwa (2021), include the purpose of maintaining and improving physical and mental health while performing skills according to the characteristics of exercise in the field of physical education. In addition, some students do not participate in the physical education class because of injuries or poor physical condition, and some students are observing, so it is necessary to consider how to deal with visitors. However, research on how to deal with visitors to physical education lessons in junior high school has not been sufficiently conducted, and the actual conditions and issues of participation and evaluation in the lessons are not clear. Therefore, the purpose of this study is to clarify the actual situation and issues of dealing with visitors to physical education classes by conducting a questionnaire survey of junior high school health and physical education teachers nationwide. The survey revealed the following three points as the actual conditions for visitors. (1) About 80% of the physical education practical lessons held in the first semester had visitors, and about 70% of the respondents presented individual learning. (2) About 80% of the reasons for the visits were "injury", "illness", and "menstruation" and there were some considered to be unique to the physical education department, such as "forgetting to wear gym clothes" and "embarrassing to change clothes". Among them, only about 20% of the total number of visitors were described in the learning guidance plan. From these facts, we were able to find out the necessity of guaranteeing learning about physical education for visitors who have various reasons for visiting in physical education lessons.

Correspondence to : Miku HASHIMOTO

Master's Program in Health and Sports Science
Graduate School of Health Science and Technology
Kawasaki University of Medical Welfare
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : wd221002@kwmw.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.1, 2022 119–125)